ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

エイムズ唯子

連載を終えて：ナバホ族とコロナ禍

新型コロナの感染拡大を防ぐために、アリゾナ州で学校が閉鎖されたのは、３月の末でした。わたしと夫は、セドナの自宅で春休みを過ごしていましたが、休み明け直前に、学校の再開を見合わせるとの連絡が入りました。４月にはナバホのある村での宗教的な集まりがクラスター化し、現在はやや下火になったものの、感染は今も拡大しつづけています。高齢者や糖尿病の持病を持つ人の割合が高く、このままの状態が続けば、部族の存続そのものが困難になる恐れがあります。

最終回「旋律とともに歩まん」は、昨年秋にほぼ書き上がっていた文章でした。新型コロナの脅威の前に、世界が急ブレーキをかけたとき、わたしはナバホの地で日々刻々と深刻化するコロナ禍の様相を文章にすることができませんでした。連載初回から、原稿の推敲を助け、校正し、わたしの求めるものを的確に察知して、文章に寄り添ったイラストを描いてくれていた長谷川陽さんとは、しばしば LINE でメッセージを送り合っていました。陽さんとのやりとりを再構成する形をとりながら、春からの５ヶ月を振り返ってみます。

陽（以下**よ**）：**オンライン卒業式の予告動画のリンク、ありがとうございました。映像のデザインもステキでした。本番（５月２２日に本編動画を配信）も無事に終ったようでよかったです。**

唯子（以下**ゆ**）：見てくださってありがとうございます。職業技術科でコンピュータグラフィックスを教えているネルソン先生が中心になって作ったビデオです。いつもなら、卒業式のハイライトは、卒業生がひとりずつ壇上にあがって、校長先生から証書をもらって、それからステージのはしまで、歓声を受けながら歩くところなんです。卒業するイコール Walk across the stage なので、実際にステージを歩かせてあげられなかったことは、残念でした。唯一なぐさめられたのは、わたしのお気に入りの、例の行進曲「威風堂々」が動画の BGM として流れていたことかな。

よ：国境なき医師団がナバホ入りしたそうです。元東京新聞ニューヨーク支局長でアメリカの事情に詳しいジャーナリスト北丸雄二さんの Twitter をいつもチェックしていて、そこで知ったのですが、アメリカ合衆国での医師団の活動は、いままでに例がないとか。

ゆ：それは知りませんでした。ニューヨーク州の感染率が全米で最も高いといわれていましたが、ディネの国の感染率は人口比ではすでにニューヨークを超えてしまいました。６ 月からずっと、平日の夜間と週末（金曜日の夕方から月曜日の早朝まで 57 時間）の外出禁止令が出ていて、当分は解除されそうにありません。学校も、少なくともクリスマスまでは、オンライン授業と決定しました。

よ：唯子さんのコラムに、水道がない家庭が多いとあったように、手を洗おうにも満足に水を使えない状況なのですね。

ゆ：ある生徒のお母さんは、買い物や子どもたちの学校の用事を済ませるためにどうしても外出しなければならないときは、マスクや手袋のほかに、石けん水を入れた蓋つきのバケツを車に積んで、走り回っているそうです。このバケツ、アイスクリームの空き容器で、ぬか漬け用のプラスチックの樽くらいのサイズ感かな。それを聞いて、お母さんたちの必死さがずしんときました。アメリカのアイスクリームの入れ物、見たことあります？

よ：映画で出てきますよね。よく、恋人の愚痴なんかいいながらルームメイトと一緒にでっかいスプーンで食べたりする、あれですね。消毒液もやはり足りていないのでしょうね。

ゆ：ナバホの人たちは、清潔好きなんです。生徒に近づいたときに、体を洗っていないのかな、と思うような経験は、ごく少ないです。むしろ、わ

たしがランチに食べたものを、生徒たちがにおいで当ててくるくらい、鼻がいいし、衛生的に暮らしているようです。だから、新型コロナの感染率がこんなに高くなってしまったのは、情報が行き渡っていないのではないかと思ったのだけど、ナバホの人たちがよく聞いている地元のラジオ局などでも、周知の努力を相当していたみたいだしね。インフラが不十分なことに加えて、ナバホの人たちは、日本でいう言霊みたいに、口にのぼらせたことが本当になってしまう、という迷信にとらわれがちなところがあるんです。感染を予防するために、マスクをしたり、相手から距離をとって生活することに、わたしたちが思う以上の、強い抵抗があったのかもしれないですね。

よ：もともとの貧困だけでも不利なのに、文化や慣習までもが悪い方向に働いてしまっているんですね。世界的に学習のオンライン化が進んでいますが、ゲナード高校ではどうでしたか？

ゆ：自宅にインターネットがない生徒が半数以上だから、まずそこからでした。学校の駐車場で Wi-Fi に接続できるようにしたり、備品の古いパソコンを消毒して配布したりは、管理職と警備スタッフが対応してくれました。新年度が８月にはじまってからは、移動式の Wi-Fi ホットスポット（ワイヤレスでネット接続できる場所）をスクールバスで僻地の部落に出前しています。学校まで取りにくることができる家庭には、給食の配布もしています。それにしても、ふだんおとなしくて、課題もなかなか一人では出せないような引っ込み思案の生徒が、オンラインの自宅学習になったら、がぜん宿題を次々出したりして、これにはびっくりさせられました。

よ：集団生活のストレスから解放されたことがモチベーションにつながったんですかね。自分も学校という世界がしんどくて不登校になりましたから、いま中高生だったら、休校にホッとしていたと思います。学校が再開しても、ひとつの選択肢としてオンライン授業は残してほしいです。

ゆ：日本のアンケート調査で、在宅勤務が増えると、対面でのコミュニケーションが苦手な人が増えるんじゃないか、って心配している人が４人にひとりくらいいるそうなんだけど、対人が苦手な人が働きやすい社会になるかもしれないですよね。

よ：激しく同意、ですね。人との接触を避けることや家にこもることが正当化される事態となり、心がラクになったという人もけっこういるようです。古いシステムや常識が崩れて、世界が大きく変わる予感がします。自然界と人類とのディスタンスも真剣に考え直すべき時なのではないでしょうか。ナバホの社会は、これからどう変わっていくと思いますか？

ゆ：まずはパソコンの普及！ナバホでは携帯電話がコミュニケーションの主役ですが、タブレットやノートパソコンを購入する家庭が増えています。これからの変化を占うとしたら、生徒や親たちの意識のなかで、学校というものの価値がポジティブに変化したらいいなと期待しています。新型コロナのために学校に通えなくなってはじめて、先生たちの顔をみながら勉強することができないのが、どんなにさびしいことかわかった生徒が多いみたいです。先住民の伝統的な捉え方では、学校とは白人たちのもの。「ビラガーナ」っていうナバホ語は、「白人野郎」っていう意味だけど、先生たち＝ビラガーナだった。子どもを寄宿学校に取り上げられ、自分たちの言葉を禁じられた歴史を考えれば、理解はできるけれど、学校も教師も、無理矢理あてがわれたもの、と決めつけていると、壁にぶつかったときに「どうせビラガーナのものだから」とあきらめてしまう。自分たちが勝ち取った権利として、公教育をとらえなおしてほしい。ずっとそう思っていました。コロナの危機が、せめてそのきっかけになれば、と願っています。押しつけられたんじゃないよ、自分たちのものとして愛していこうよ、っていうあたり、日本人にとっての日本国憲法、みたいじゃない？

よ：なるほど。こちらも、激しく同意！です。